現代文学会　講演会対策勉強会

2005/11/25　梅田　有佳

中野重治と植民地人 ～朝鮮へと向けられたまなざし～

0. はじめに

今回の講演者である林氏の著作『昭和イデオロギー』を通し、散文詩「雨の降る品川駅」を初めて読んだ時、私はそこに描かれた中野重治の朝鮮の人々への<まなざし>に圧倒され、ほとんど感動にも近い驚きを感じた。私の内にある昭和初期のイメージがそうさせたのかもしれない。韓国が日本に併合された当時、国を失い住む土地を失った朝鮮の人々に対して、侵略者の側にあった「日本人」の中にも、中野のように<まなざし>を向けることのできる人間がいたということは、私にとって新たな発見であったのだ。

何故か私には、当時の日本人は皆一様に日韓併合を新たな領土の獲得として捉え、歓迎しているだけであったので、それによって朝鮮の人々が受ける苦しみなどを顧みることはなかったのだという奇妙な先入観があった。むしろ、私も林氏の著作を読み、中野重治に出会わなければ、日韓併合はせいぜい教科書で学んだ歴史の一事実として記憶の中に埋もれ、その意味を問い直すことも、歴史的事実の裏に傷を負った人々が存在したことに気付くこともなかっただろう。それは、今回の講演会の宣伝文にもあったように、ひどく「暴力的な」態度である。「雨の降る品川駅」に描かれた中野重治の柔らかで熱い<まなざし>は、そんな私に深い自己反省をもたらした。同時に私は、この<まなざし>の根元を探ってみたいという思いに駆られ、今回の勉強会のテーマは決まった。

中野重治が朝鮮の人々に向けているのは<視線>というよりも<まなざし[1]>という表現が適当であると思う。<視線>には表情がない。<まなざし>には表情があり、表情には込められた何らかの感情が存在する。そして中野重治は、他者への、特に朝鮮の人々への<まなざし>を生涯持ち続けた作家である。それは彼の作品の随所に朝鮮の人々の姿が描かれていることで見受けられる。

この<まなざし>とはどのようなものであるのか、どのようにして生まれたのか。そして<まなざし>を持つことはどのような行為に繋げていくことができるのか。本勉強会では、中野重治から朝鮮の人々へと向けられた<まなざし>について、彼の作品や評論を追うことによって、<まなざし>を持つことの意味を考えていきたい。

---

[1] 「眼差し」は、目をある方向に動かす点で「視線」と似ている。ただ「視線」は、見るものと見られる対象がつながり合うことに基本の意味があるが、「眼差し」は目に込められた表情を含む点が異なる。
『類語新辞典』角川書店（1981）

1. 「かわいそう」という意識

中野重治は、自伝的評論『嘘とまことと半々に』においてこう述べている。

僕の顔は日本人よりも支那人もしくは朝鮮人に似ている。（中略）そのため僕は朝鮮と朝鮮人とが非常に好きだ。

僕は、それが好きだというのではないが、びっことか、ぎっちょとか、若白髪とか、そばかすとか、それを見ているとこっちの眼が痛くなるような眼とかいうものに引かれる。すべてかわいそうなものの美に引かれる。僕自身がかわいそうなやつである証拠だろう。[2]

題を文字通りに受け取るのであれば、この文章には嘘と真実が半々に織り交ぜられられて語られているととれる。冗談半分に、という受け取り方もできると思われる。だが、若白髪やそばかすを「かわいそうなもの」として扱っていることはともかくとして、この二段落が続いているということは重要なことであるだろう。中野が朝鮮の人々を好きな理由もまた、「かわいそうなもの」であるからではないか。それにこの「かわいそう」という意識は、中野の小説の中で、たびたび朝鮮の人々に向けられる感情として描かれているのだ。

中野重治は明治35年、福井県坂井郡高椋村一本田に五人兄妹の次男として生まれた。両親は重治と兄耕一の学費を稼ぐために朝鮮へ渡り[3]、重治は幼少期を祖父母の元で過ごした。日韓併合が行われたのは明治43年のことであり、重治八歳の頃だった。自伝的小説「梨の花」は、主人公の良平が、出稼ぎ先の朝鮮から故郷へ帰ってきた父親が、韓国を併合する際に日本側がいかに卑劣な手段を取ったかという話をしているのをまどろみつつ聞く場面で、良平の感情を以下のように描き出している。

校長さんがああ話しなったものの、天皇陛下と朝鮮の王さまとで相談したからとはいっても、やっぱり朝鮮人は腹を立てているのらしい。（中略）話のそんなところが良平にもわかってくる。日韓併合のときの話だ。朝鮮の王さまが気の毒になる。[4]

自伝的小説を自伝そのものと見なして語ることは、真実の部分と創作の部分との混濁を招くという意味で危険なことである。だから、実際に八歳当時の中野が日韓併合に対して上のような感想を抱いたかどうかはっきりと断定することはできない。父親が朝鮮で役人をしていたために、公的な機関（この場合は学校の校長が挙げられている）の発信する以外の情報を得る機会は十分にあったということが言えるのみである。だが、かなり早い時期から中野は朝鮮の人々へこのような感情を向けていたということは、初期の短編小説「国旗」にも似たような記述があることから読みとれる。

「国旗」は、朝鮮に出稼ぎに来た男の妻の心情を描いた短編である。この妻とは言うまでもなく中野

---

[2] 中野重治「嘘とまことと半々に」
[3] 重治の父藤作は、朝鮮総督府臨時土地調査局で役人として働いていた。
[4] 中野重治『梨の花』p245

の母親がモデルになっている。「梨の花」とは対になっているとも言える。彼女は内地に残してきた息子を恋しがり、内地に帰りたいと思うが、それを言い出せずにいる。そんな折に日韓併合が起きる。以下にその場面を引用する。

そのうちに突然朝鮮が日本のものになることにきまった。お房はそんな噂を今まで一度も聞いていなかったので驚いた。そして朝鮮人がかわいそうでもあり、またわけもわからず日本人が浅ましくも思われた。[5]

このような文章を書いたということは、中野自身が当時すでに朝鮮の人々に同様の思いを抱き、<まなざし>を向けていたことの証拠たりうるのではないか。「かわいそう」という思いが実際に中野の胸の内にあったからこそ、小説に表すことがことができたのではないか。だが、当時の中野はまだ、朝鮮の人々に直接の関わりを持ち、「志を同じくする仲間」という意識を持つまでには至っていなかった。「雨の降る品川駅」の完成までには、この後十年あまりの年月を必要とする。

ここで、昭和初期の朝鮮観について触れておきたい。

日韓併合という出来事は、日本の国民にとって喜ばしい出来事であるという認識が、当時の日本人には存在していた。それは、西洋を基準として朝鮮を後進国と見なし、自分たちが後進国を先進国にしてやろうという押しつけの使命感や、歴史的に見て、古代朝鮮半島は日本の支配下に置かれていた[6]のだから、関係が「本来の状態」に戻ったのだという主張に基づき、「朝鮮人」を一括りにして剥き出しの差別感情をぶつけるという形で民衆の間に広まっていった。そこには、朝鮮に国を失って苦しむ人々が存在することを顧みる視点は存在しない。中野重治は国と国との関係を政治的関係、個人と個人との関係を文学的関係とした上で、「日本人の朝鮮観」というシンポジウムの中で、こう語っている。

日本の朝鮮に対する関係が、ご承知の通りの軍事的、政治的関係で、それが国の方針であったために、日本文学が朝鮮及び朝鮮人を積極的に捉えられなかった面もあると思います。[7]

中野が指摘した通り、昭和初期から敗戦にかけて書かれた、朝鮮や朝鮮の人々を真っ向から扱った作品は非常に少ない。これは日本人が朝鮮を自分たちよりも劣ったものと見なし、彼らの築き上げてきた文化に無関心であったことにその根元があるのだろう[8]。

次に、青年時代の中野とマルクス主義の関わりから、<まなざし>の発展を見ていきたい。

---

[5] 中野重治「国旗」（なお、この短編の初出は 1921.7「北辰会雑誌」である）
[6] この歴史観は実際に当時の歴史教科書にも書かれており、敗戦までその記述が改められることはなかった。
[7] 旗田巍『シンポジウム　日本と朝鮮』p32
[8] 例えば、朝鮮史研究の分野では、彼らの文化は日本より数百年単位で遅れており、日本で言う平安朝の時代に相当するという停滞論が主流であった。

2.　マルクス主義と「微少なるものへの関心」

中野重治は大学二年生の夏、同人時代の友人を通して東京帝国大学新人会に入会する。当時の新人会は福本和夫による福本主義（福本イズム）の影響を強く受けており、中野もまたその影響を受けずにはいられなかった。だが、彼が新人会に入会したきっかけは、「理想」や「使命感」によるものではなかった。むしろマルクス主義なるものにほとんど無知のまま、いわばマルクス主義に対する偏見や思いこみを何も持たずに入会したのだ[9]。こうした中野の内部では、マルクス主義思想が彼自身の抱いていた文学的な思想と結びつき、政治的な面で急進化する仲間達とは一線を画した発展を見せた。

若き日の中野は、マルクスの論文「猶太人問題を論ず」に触れ、感銘を受けたという。「猶太人問題を論ず」は、ユダヤ人の解放問題を通して、宗教的な、また政治的な面から人間が真に解放されるためには何が必要かを説いた文章である。中野がそこに読みとったのは、マルクス主義における、民族を越えた人間解放の思想だったのではないだろうか。

やがて人間解放の思想は、中野の内に根付き、「微少なるものへの関心」という形で表象される。「微少なるものへの関心」という言葉は、プロレタリア文学論「詩に関する断片」の中で初めて示された。幻想詩でもなく、回想詩でもない無産階級的な詩を書くためには、**豪宕なる拍調と新鮮なる感覚とを持ち、その歴史的使命を自覚せる無産階級の意識によって裏づけられた吾らの詩は、微少なるものへのこの関心を恐らくは必要とする**[10]だろうという一節は、マルクス主義がヒューマニスティックな発展を見せた、中野独自の思想を明確に示している。

竹内栄美子は中野重治について述べた著書の中で、「微少なるものへの関心」を**ともすれば見過ごされてしまうような些細であわれなものに心をくだけということ**でも、**かわいそうなものに目を向けなさい、という通俗でセンチメンタルなこと**でもないと述べている[11]。だが私はむしろ「微少なるものへの関心」とはそもそも「かわいそう」という意識から生まれてきたものであると思う。「かわいそう」という意識そのものではないが、生まれてくる過程には「かわいそう」という意識が存在していただろう。前章で取り上げた「嘘とまことと半々に」は、この「詩に関する断片」とほぼ同時期に書かれている。

「微少なるものへの関心」を重視する理由は、**いかに微少なる発見をもおろそかにしてはならない**からであると中野は説く。**それは事実に関するからであり、事実すなわち物こそ、そして物のみが、真**

---

9 **『新人会創立五十周年記念の席で』では、いくらか謙遜の気味はあったにせよ、ぼんやりしたまま社会科学もマルクス主義もあまり知らないで新人会に入っていった、と回想している。**竹内栄美子『人と文学　中野重治』p52

10 中野重治「詩に関する断片」

11 竹内栄美子『人と文学　中野重治』p61

実の知識を与えるからである[12]という。それはつまり、観念的、理論的な思想から生まれた詩ではなく、事実から与えられた具体的であり判明な表現こそ詩においては重視すべきであるという中野の主張である。

中野にとってのマルクス主義、ひいてはプロレタリア文学はこういった唯物主義的なヒューマニズムの精神を土台として発展した、林氏の言葉を借りるなら、中野の福本イズムの独自性は「微少なるものへの関心」との結合の上にあり、それらがマルクス主義を媒介した[13]のだといえる。この「微少なるものへの関心」が、中野の<まなざし>の根元ではないか。散文詩「雨の降る品川駅」は、この「微少なるものへの関心」の最も力強い発露となって世に出されたのだ。

3.　<まなざし>の限界―――雨の降る品川駅

散文詩「雨の降る品川駅」は、一九二九年の昭和天皇の即位式である「御大典」の直後に書かれたものである。初めてラジオによって全国に放送され、十一ヶ月もの間盛大に執り行われた儀式の裏側で、不穏分子として朝鮮に強制送還となった人々に対し、天皇に復讐することを呼びかけるという内容である。(この詩の歴史的背景やイデオロギー的な意義については先日の後藤勉強会レジュメを参考にして頂きたい) この詩が朝鮮の人々に対する「呼びかけ」の形を取っていることこそが、中野重治の<まなざし>を見ていく上で重要なことであると思う。「雨の降る品川駅」以前には、明確に朝鮮の人々に対するものとして「呼びかけ」という形で発表された作品はない。「御大典」という行事によって、抑圧を受ける人々がいた、という事実は、中野にとって無視できない事実であった。「雨の降る品川駅」は、抑圧された朝鮮の人々への呼びかけ、励ましの詩であると同時に、中野の<まなざし>が言葉に形を変えて世に現れたものであるのだ。それは朝鮮語に翻訳され、多くの抑圧された人々の心を打った。だが、その翻訳が発見され、日本語に再び訳された時に、ある誤訳とある意味の取り違えによって全く意味の違った物になってしまったのだ。

資料としてお配りした二つの詩の最終聯部分を見ていただきたい。片方は天皇に実際に刃物を「突き刺し」、返り血を浴びながら復讐の歓喜に泣き笑えという訳になっているのに対し、もう片方は刃物を「突きつけ」るのみにとどまり、奔る血、それは天皇の血ではなく復讐の歓喜を感じている「あなた方」のものである。天皇を殺してしまうのであれば、それはただの安易なテロリズムの表現になってしまう。中野が鎌先を突きつけたかったのは「天皇制」という制度そのものであり、「天皇」という個人を殺したいという思いは中野にはなかったはずだ。

だが、詩が書かれてから半世紀後の中野は、朝鮮語から日本語に訳された版を見て、誤訳を指摘

---

[12] 同上
[13]木挽社編『新潮日本文学アルバム　中野重治』p37

することはせず、またこの「天皇暗殺」を否定しなかったのである。全集の著者うしろ書きで、中野はこう述べている。

むしろ私は、仮に天皇暗殺の類のことが考えられるとして、なぜ詩を書いた日本人本人にそれを考えさせなかったか。なぜそれを、国を奪われたほうの朝鮮人の肩に移そうとしたか。そこに私という国を奪った側の日本人がいたということだった。[14]

彼は、当時自身の抱いていた<まなざし>のことを忘れてしまっていたのだろうか。中野の元に届けられた朝鮮語訳が誤訳ではないものであったら、おそらく彼は違ったコメントを寄せていただろう。

もう一つ、「雨の降る品川駅」には長い間誤解を生んできた部分が存在する。「日本プロレタリアートの前だて後ろだて」という部分である。「前だて」という単語は中野の造語であり、「後ろだて」の対義語として使われている。誤解というのは、この「前だて」が「盾そのものの働きをするもの」として受け取られたからであった。「雨の降る品川駅」が発表されてから、中野重治は「季刊三千里」という雑誌に、「「雨の降る品川駅」のこと」という題で短い説明を載せている。

この文章では、「おたずね」のあったことに対して段落ごとにその回答が出されている。注目したいのは、「日本プロレタリアートのうしろ盾まえ盾」に関して、中野が「民族エゴイズムのしっぽ」という表現を使っていることである。この民族エゴイズムという表現は、つまり「日本プロレタリアートのまえ盾」という言葉の中で、日本人が、本来朝鮮の人々とは助け合い、共に戦わなければならない無産階級の日本人が、彼らを盾として、「弾丸避け」として扱うことという意味に受け取れる。林氏はこの「盾そのものの働きをするもの」と受け取られてきた「まえ盾」という表現は、「先駆け」という意味であるとして、共同研究訳で訂正している。確かに、「先駆け」であればそこには中野の言うような「民族エゴイズムのしっぽ」ではなく、仲間として、そして日本という国や天皇制よって自分よりも多くの痛みや苦しみを味わってきた相手への、尊敬の念がそこに読みとれるであろう。それこそが真の中野の<まなざし>であると思う。

だが、私は中野がある種卑屈なまでの「日本人である自分自身」と「植民地人である朝鮮の人々」との違いについて「民族エゴイズム」や「国を奪った側の日本人」という言葉で述べているのは、中野にはある種の負い目があったからではないかと思う。だから誤訳を誤訳のまま、誤解を誤解のままコメントを行ってしまったのではないだろうか。どれだけ朝鮮の人々に<まなざし>を向け、力強い言葉で鼓舞しようとも、そこには依然として自分自身が日本人であるという溝が存在する。日本人は日本人であって朝鮮人にはなりえない。そういった意識が中野に「民族エゴイズムのしっぽ」という表現を使わせたのではないだろうか。「雨の降る品川駅」が書かれた当時、中野自身は朝鮮の地を踏んだことも、朝鮮語を学んだこともなかった。それ以降も学ばなかったのは時間を作ることができなかったためと弁解

---

[14] 中野重治「中野重治全集二十四巻　著者うしろ書き」

しているが[15]、学ばなくても事足りたという理由もあったのではないだろうか。彼が関わりを持った朝鮮の人々は、日本の地で暮らし、日本語を話していた。彼らの国ではない国で、彼らの言語ではない言語で話し、朝鮮の人々を強く励まそうとする行為に、<まなざし>を向けるだけでは事足りないという思いを、疑問を感じたのではないかと思う。

<まなざし>を向けることには限界があるということだろうか。中野は<まなざし>と、<まなざし>を向けられるべき人々のことを、詩や小説や評論などを通じて積極的に世界へと発信した。それは<まなざし>を向ける以上のことであった。だが、そうすることによっても埋めきれない溝は存在する。「民族エゴイズムのしっぽ」とは、ある意味では中野の感じていた限界を表す言葉であると、私は思う。

4. おわりに

「雨の降る品川駅」は、中野重治の生み出した作品の中で最も彼の<まなざし>を表現した作品であると思う。だからこそ、世代を越えて多くの人々に親しまれ、その時代のことを何も知らなかった私でさえ、詩に込められた感情を「感じる」ことができた。

林氏は著書『昭和イデオロギー』の冒頭部分でこう述べている。

個別化と全体化を同時に可能とするイデオロギー支配に、人間的な高い感情をもって肉迫した言葉を、私は「雨の降る品川駅」以外に知らない。[16]

この「人間的な高い感情」が生まれえたのは、他者に対する深い<まなざし>が存在したからであった。<まなざし>を向ける姿勢は文学の形をとって世界に発信され、また<まなざし>を向けられるべき人々に対する呼びかけは「雨の降る品川駅」という詩となって生み出された。この勉強会に参加した方々に、中野重治の<まなざし>を感じ取っていただけたならば幸いである。

今回の勉強会では、「文学の面から」アプローチするということで、「歴史」ひいては「戦争」というテーマに対して必要最小限のことしか触れることができなかったことが残念である。また、余裕があれば、1で述べた「日本の朝鮮観」の問題にもメスを入れてみたかったし、もう一方の視線、つまり朝鮮の人々が中野重治に対してどのような思いを抱いているのかを調べてみたかったが、私の力量不足のために実現できずに終わってしまった。

講演会のテーマからは多少外れた観があったが、私の勉強会はこれで終了である。だが、戦争に限らず<まなざし>を向けられるべき「他者」は数多く存在している。これから先、そういった人々に対しても、<まなざし>を向けることを考えることができればと思う。

参考文献

---

[15] 中野重治「朝鮮問題雑感」
[16] 林淑美『昭和イデオロギー』p10

林淑美『昭和イデオロギー』平凡社　2005
木挽社編『新潮日本文学アルバム　中野重治』新潮社　1996
鄭勝云『中野重治と朝鮮』新幹社　2002
中野重治『梨の花』岩波文庫　1985
中野重治『中野重治　作家の自伝 67』日本図書センター　1998
中野重治『中野重治全集六』筑摩書房　1959
中野重治『中野重治全集十五』筑摩書房　1997
中野重治『中野重治全集二十二』筑摩書房　1998
中野重治『中野重治全集二十六』筑摩書房　1998
旗田巍『シンポジウム　日本と朝鮮』勁草書房　1969
竹内栄美子『人と文学　中野重治』勉誠出版　2004
カール･マルクス『ユダヤ人問題によせて』岩波文庫　1974